

勤続三か月以上の者には生命保険料の全額を会社が負担し、死亡のばあいは三〇〇円を限度に保険金を会社から支払っていた。また言語障害をとり除くのに、補習学級を会社で設営し、国民学校四年終了程度以上の者を「上」国語をある程度理解するものを「中」全然理解できない者を「初」級の三学級にわけて「訓育」および国語知識の教化に勤めたとし、このほか福利施設なども種々の目配りがみられた。

しかし昭和十五年二月、九八人の第一陣が到着した早々、四〇人の朝鮮労働者が会社に押しかけて待遇改善の要求をし会社がこれを認めた。同年四月には三月分の賃金支給をうけた九七人が「応募時の条件と違う」として賃上げのストライキを決行し主謀者三人が強制送還されたりした（『特高月報』から）。国籍の異なる人たちへの労務管理が、かなり難しかったことがわかる。当時の労務担当者によると「給与のほかに食費（当時一日五十銭）や寝具代（一組月五十銭）のほか、無料支給と思っていた地下足袋などの作業必需品がすべて本人持ちだったほか、労務や勤労課職員の一部に極端な差別意識を持った人たちがかなりいた」などと、当時の朝鮮人労働者の争議の原因を回想している。相川に残る朝鮮人宿舎への煙草配給台帳（第一・第三・第四相愛寮分）によると、この台帳に登録された朝鮮人は、おおよそ四六〇人。昭和十八、二十年在寮のもので、すべて生年月日（本籍は不明）が記載されている。これによると登録時の平均年齢は二八・七八歳で、三〇歳未満の若い人たちが大半を占めていた。

記録が町にはほとんど残っていないが、昭和二十年八月、敗戦が色濃くなったころ、佐渡鉱山の朝鮮人の多くは「特別挺身隊」として埼玉と福島県に出張動員される。同年九月十一日、相川警察署長から新潟県知事に出された「休戦時ニ於ケル移入朝鮮人労働者ノ動静ニ関スル件」によると、第一次特別挺身隊として一八九人が埼玉県に、第二次分として二一九人が福島県に、計四〇八人それぞれ集団派遣された。鉱山に残留することになった朝鮮人労働者は二四四人とされるされている。

福島へ派遣されたのは福島市御山の信夫山（標高二六八メートル）の中腹を掘って、約三万三〇〇〇平方メートルの地下に、東京から疎開させた中島飛行機（現富士重工）のエンジンを製作する耐弾地下工場を建設するため、月産エンジン三〇〇台が目標だったとされる。これは昭和二十年三月に着工されたが、八月には敗戦になり約三分の一を掘ったところで工事は中断された（毎日新聞「社会面、平成3・7・15日付）。埼玉県の軍需工場については明らかではないが、当時の労務担当引率者によると、鑿岩機を持って出かける組も多かったという。

太平洋戦争が始まると、佐渡鉱山は軍需工場として銅の生産に全力をあげていた。が同じ三菱系の尾去沢鉱山（秋田県）などは、「昭和十八年に全国一の銅の生産で政府から表彰されるほどだった」（杉本泰二氏による）のに、佐渡鉱山は銅については実績が上らず、幹部たちは四苦八苦していた。朝鮮人の労働力にも余剰をきたしたわけ、両県の地下工場建設に、佐渡鉱山で働いていた内地人が派遣組に加わったとされるような資料はない。

さて、敗戦によって、朝鮮人たちは続々と帰山してきた。福島組は二十年八月二十六日、埼玉組は八月二十七、八日に佐渡に到着し

山口太恵子 61 主婦（新潟市）

日本による朝鮮の強制労働者が問題化し、佐渡相川の鉱山で働かされた人たちものことも報道された。あのころは鉱山全体が増産、増産で昼夜の別がなかった。

遠く故郷を離れた地で働かされた朝鮮の人たちを思うと心が痛むが、今回名簿が発見され、生存者を捜し出して相川へ招待すると聞き大変喜んでる。

当時、私も鉱山の社宅に住んでいた。その社宅の幾棟かには家族持ちの朝鮮の人たちが住んでいた。私の母は仲良く交際していたがそのうちのある奥さんが大豆モヤシを作るのがとても上手で、わが家もときどきいたいで食べたのを覚えている。

朝鮮の人たちは「相川の人たちは親切だった」と言っていると聞き、ほっとしている。わが家と交際していた人たちの消息は分からないが、せめて生き残っている人たちと相川の人たちの交流が再開することを心から願っている。

〔新潟日報〕平成3・12・15日付投書欄